

〔研究ノート〕

A. グラムシと千年王国運動に関する覚書

松田 博*

本稿ではグラムシの『獄中ノート』における「サバルタン・ノート」の総体的意義の検討およびグラムシのサバルタン概念の生成に大きな影響を与えた、イタリア中部の千年王国運動を分析した「サバルタン・ノート」の第1草稿の検討を課題とする。また「南部」表象の形成に大きな影響を与えた犯罪人類学・社会学の創始者ロンブローゾ等の実証主義派知識人の問題も併せて検討し、さらにサバルタン研究という主題が「南部問題」という歴史的・地理的に限定された主題から、その限定を大きく超える主題へと展開されていく過程を検証する。

キーワード：グラムシ、『獄中ノート』，南部問題，サバルタン，千年王国運動，ロンブローゾ，実証主義

目次

はじめに

1. 『獄中ノート』旧版の問題点
2. 『獄中ノート』校訂版の問題点
3. ロンブローゾと千年王国運動
4. サバルタンと知識人

おわりに

はじめに

本稿は、グラムシの「サバルタン・ノート」の成立過程と関連草稿の分析を通じて、この「ノート」の内容と含意を検討することを課題とする。まず第一には、この重要な「ノート」が長期にわたって「忘れられたノート」と化し

た主要原因である『ノート』旧版（問題別選集）の問題点を検討する。第二に、『ノート』旧版の「限界と不適切さ」を多くの点で克服した『ノート』校訂版における問題点、とりわけ同「ノート」を含む一連の「フォルミア・ノート」の相対的軽視の問題点を検討する。第三に、グラムシがイタリア中部の（「南部」ではなく）サバルタン運動＝千年王国運動に注目したその含意を検討し、そこに初期の「南部問題」から「サバルタン問題」への新たな展開・発展の契機が含まれることを明確化したい。最後に、知識人論とサバルタン論との関連性について問題点の整理を行い、今後の課題を検討したい。

* 立命館大学産業社会学部教授
matsuda@ss.ritsumeai.ac.jp

1. 『獄中ノート』旧版の問題点

いわゆる「サバルタン・ノート」(第25ノート、以下Q25と略)は、一連の「フォルミア特別ノート」のなかの一冊であり、グラムシ晩年の探究の到達点を知るうえで重要な「特別ノート」であるが、長期にわたって「忘れられたノート」と化していた。それは『獄中ノート』旧版(問題別選集、エイナウディ版、1948～51)の編集方法の問題点に起因する。Q25は、旧版では第3巻「リソルジメント」の巻末に「付録」として収録されている。この「付録」には26の草稿が含まれているが、Q25の8草稿のなかで入っているのは6草稿だけである。第3草稿は「文献ノート」欄に収められ、また第8草稿は第5巻「文学と国民生活」に移されている。したがってこのQ25(タチアーナ整理番号では)は、主題が明確な「特別ノート」としての統一性は考慮されず、三つの部分に分割され、しかもその主要草稿群(第二次執筆のC草稿であるが)は、他の「ノート」の草稿群(単次執筆の暫定稿的なB草稿が大半を占める)に混入されたため、独立した「ノート」としてのQ25は事実上「解体」されてしまったのである。つまりサバルタンに関するグラムシの系統的探究(それはQ1から開始される)の軌跡を読み取ることは、この旧版からは不可能となり、知り得るのは断片的なサバルタン関連草稿のみであり、Q25という独立した「ノート」が注目されるようになるのは『獄中ノート』原本をほぼ忠実に再現したグラムシ研究所「校訂版」(ジェルラターナ編、1975、以下校訂版と略)刊行以降のことである。

ではなぜQ25は「解体」「断片化」されてしまったのか。その根拠は旧版の序文に明らかで

ある。つまり、この「付録」には「『ノート』原本においては《従属的諸階級の歴史 *Storia delle classe subalterne*》という論題をもつ若干の草稿が集められている。しかしこの論題は、グラムシが作成した1929年と1932年の二つの研究計画にも、また32年の諸論題の再編成にも含まれていない¹⁾。この序文の論旨は明確である。すなわちサバルタンに関する一連の草稿が『ノート』に記されているが、それはグラムシの二つの「研究計画 *programmi di lavoro*」にも「諸論題の再編成 *raggruppamento per materia*」にも含まれていない論題であり、したがって「リソルジメント論」を補完する第二義的草稿群として「付録」に収録したというのである。編者の見解は一見明快だが、その論拠である「研究計画」および「再編成」を検討すると、その見解の問題点が浮かび上がってくる。

まず「二つの研究計画」とは、第1および第8ノート冒頭に記された研究計画(Q1・Q8プラン)のことである。前者には「歴史と歴史叙述の理論」に始まる16の「主要論題 *Argomenti principali*」が記されている。後者には、グラムシが当初から最も関心をもったテーマの一つである「イタリア知識人の歴史」に関する諸論題を集約するための構想およびやはり当初よりグラムシが重視したテーマである「アメリカニズムとフォード主義」、さらに「諸論題の再編成」として「知識人、教育問題」にはじまる10論題が含まれている(旧版では両計画とも第1巻『史的唯物論とB・クローチェの哲学』序文で紹介されている²⁾。たしかに両計画に個別的論題としてサバルタンに関するテーマは明示されてはいない。しかしながらQ25の各草稿およびその関連草稿の内容を踏まえれば、

サバルタン論は個別的論題に納まる性格ではなく、各個別論題を貫ぬく横断的テーマであることが明確である。たとえばQ1プランの「歴史と歴史叙述の理論」にはヘゲモニー集団の「歴史」から排除され「歴史の周縁 *Margini della storia*」に追いやられたサバルタン集団の「歴史と歴史叙述の理論」の探究が含まれる³⁾。またQ8プランの「主要な考察 *Saggi principali*」における知識人論に関連する18の分節化された個別テーマは、いずれもサバルタン論と密接に関連していることは明らかである。知識人論とサバルタン論は相互補完的テーマと言ってよい。また「諸論題の再編成」に記されている諸テーマについても同様である⁴⁾。したがって旧版の編者が「研究計画」やそれを補完する「再編成」においてサバルタン論関連テーマが個別的論題として明示されていないことをもって、Q25を解体・断片化・周辺化することの合理的根拠は存在しない、と言えよう。また同上の「研究計画」を固定的に捉えるならば、Q25のみならず初期・中期の「研究計画」からの一定の新たな展開・発展を示す後期の一連の「フォルミア・ノート」の意義は軽視される結果とならざるをえない。この点は「校訂版」の問題点とも関連し、『ノート』全体の解説にも関わる論点でもあるので次にその要点を検討しておきたい。

2. 『獄中ノート』校訂版の問題点

前述したように『ノート』校訂版（ジェルターナ編）は『ノート』原本の復元に近い内容で、その意味で旧版のごとく各「ノート」が解体され、断片化されるというような欠陥を免れており、『ノート』に内在する研究という点が

らも画期的な意義を有した。また校訂版によって旧版（問題別選集）に内在する「限界と不適切さ」（ジェルターナ）も明らかとなった。

しかしながら校訂版にも旧版とは異なる意味で「限界と不適切さ」が存在する。それを簡潔に要約すれば「Q8プラン＝最終計画」論であり（それは第二期の「トゥーリ・ノート」重視に直結する）、したがってQ25を含む第三期の「フォルミア・ノート」の相対的軽視にならざるをえない。「基本的にこの計画が（Q8プランを指す引用者）、研究の新たな過程で一定の補強や部分的変更によって修正されるとしても、『ノート』の最終計画として残るのである」⁵⁾とジェルターナは述べているが、この見解を前提にすれば「Q8プラン」に入っていない諸テーマは前者に比して第二義的比重しかもたないことになる。彼は一連の「フォルミア・ノート」について次のように述べている。「新たな草稿作成においては、各草稿はしばしば新たな読書や入手できた新たな資料にもとづく一定の変更を含む推敲がなされるが、それより頻繁に行なわれるのは単純な機械的転写（*una semplice copiatura meccanica*）のごとき、そのままの転記である。おそらく最も創造的な要素は、それ以前の時期の各ノートに追加された若干の草稿に含まれている」⁶⁾。この文意では、一連の「フォルミア・ノート」の内容には「創造的要素」は少なく、その大半は、すでにそれ以前に作成された各草稿が単純に「機械的転写」された「ノート」という印象が強くなるのは避けがたいだろう。この見解をさらに単純化し「フォルミア・ノート＝機械的転写」と一面化するならば、この時期の一連の「ノート」の独自の意義（ということはQ8プランに短絡的に還元されない独自の意義、つまりQ8プランの枠組み

を超える意義ということだが）は殆ど評価されないことになり、『ノート』の全体像を少なからず歪曲してしまうことにならざるを得ないであろう。

すでに別稿でも指摘したが⁷⁾、「フォルミア・ノート＝機械的転写」説はきわめて不正確な見解である。その主な要因が「Q8プラン＝最終計画説」およびそれにもとづく第二期の「トゥーリ・ノート＝中心説」にあることは明白である。これまでの研究史において「フォルミア・ノート」の独自の意義を強調する見解は殆ど皆無に近いが、それはこの「校訂版序文」の影響・呪縛がいかにも根強かったかということの反証に他ならない。すでに旧版の問題点として指摘したが、グラムシのサバルタンにたいする関心は単なる個別テーマに納まる課題ではなく、したがってQ8プランの個別論題に明示されていないことを根拠にQ25を含む一連の「フォルミア・ノート」の意義を軽視することは『ノート』の総体的かつ内在的把握の面からも著しく正確性を欠くと言わざるをえない。

なお補足しておけば「フォルミア・ノート」（それはすべて主題が明確な特別ノートであるが）の主題にはQ25（サバルタン論）以外にもQ8プランに含まれない「ノート」が存在する。それはQ23（文芸批評）、Q27（フォークロア論）、Q29（文法・言語論）などである。したがって『ノート』全体における「フォルミア・ノート」の位置付けとしては、Q8プランの問題意識と各論題を継承しつつも、さらに同プランの枠組みを超え出て新たな展開・発展の萌芽（というのはいずれも未完に終わっているからだが）が含まれる「ノート」と考えることで、Q8プランの重要性の承認とともに「Q8プラン＝最終計画説」の問題点を克服した『ノ

ート』全体の系統的かつ総体的把握を可能にするといえよう。その意味でQ25の各草稿の分析をふまえた意義の解明は、第一には「サバルタン論」固有の意義の鮮明化とともに、第二には「フォルミア・ノート＝機械的転写説」の克服などを含む「フォルミア・ノート」のQ8プランへの短絡的還元説（最終計画説）という一面化を超える、「フォルミア・ノート」の独自の意義の把握という点からも、いわば二重の意味で重要性を有していると言っているのである。

3. ロンブローゾと千年王国運動

Q25の第1草稿は、Q3とQ9のA草稿（§12, §81）に重要な加筆を行なったC草稿であり、したがってけっして「機械的転写」などではないことはA、C草稿を対比してみれば明白であるが、ここでは後者における主要な加筆部分を検討することにより、この草稿に込めたグラムシの問題意識に接近したい。この草稿は、すでに別稿でも簡潔に触れたが、19世紀末のイタリアの千年王国運動の代表的事例のひとつであるラザレッティ運動の指導者D・ラザレッティが表題となった長文の草稿である。

二の草稿で注目されるのはC・ロンブローゾへの言及である。ロンブローゾC.Lombroso（1836 - 1909）は生来性犯罪者説（*delinquente nato*）で知られるイタリアにおける犯罪人類学および犯罪社会学の創始者（いわゆるイタリア学派）であり、ラザレッティとその運動にたいしても強い関心をもち、彼の見解はラザレッティの思想、運動についての世論形成に強い影響力をおよぼした。グラムシは、犯罪者は先天的にその身体的、精神的要因によって規定されており、それは「実証主義」的方法によって明ら

かに出来るというロンブローゾの著作『狂人と異常者 Pazzi e anormali』についてA草稿では次のように述べていた。「これは時代の流行であった。歴史的事実の起源を研究するかわりに、その中心人物を狂人とみなしたのである」。これに対応するC草稿では以下のように加筆されている。「これは時代の文化的流行であった。集団的な出来事の起源やその普及および集団性の諸々の原因を研究するかわりに、その中心人物だけを切り離し、論証もされずまた多様な解釈がありうる動機にしばしば依拠して、その病理学的伝記を作成することに限定するものであった。つまり社会的エリートにとって、サバルタン（従属的）諸集団の成員（gli elementi）はつねに何らかの野蛮さや病理性を有しているのである」¹⁰⁾。

ロンブローゾについては、Q 1からの複数の草稿において言及され、Q 25においては第1、第8草稿で重要な指摘が記されている。グラムシにとって「実証主義」問題、とりわけ「左派」にたいするその影響力の問題および犯罪等を含む社会問題等への影響力において、この知的潮流は批判的分析の対象であった。ロンブローゾはまさにその両面において巨大な影響力を發揮し、しかも当時の進歩的な思想と運動に共鳴する知識人という複雑な一面もあわせもった人物であった。ロンブローゾの思想と人間像それ自体が19世紀後半の複雑かつ多様な知的、思想的要素を体現したものであり（実証主義と当時の社会主義思想の合成など）、その意味でグラムシの見解は大変興味深いが、ここでは行論の関係上、Q 1の草稿§ 27 AおよびQ 25の草稿§ 8 Cに触れておきたい。「犯罪研究にたずさわるイタリアにおける左派的社会学(Sociologia di sinistra)の傾向。それは、この潮流には口

ンブローゾやその他の人々が参加し、当時は科学の最高の表現のようにみなされていた、という事実と結びついているのか？あるいは48年の後期ロマン主義の遺産なのか？またはイタリアでは多数の流血犯罪がこれらの人々に衝撃を与え、この現象を《科学的に》説明することなしには前に進むことは出来ないと彼らが信じていたという事実と関連があるのだろうか？」¹¹⁾。このA草稿に加筆されたC草稿はつぎの通りである。「犯罪問題に重点的に取り組んだイタリアの左派的社会学の傾向を検討するべきである。これは、当時科学の最高の表現とみなされ、また彼らのあらゆる専門的で奇抜な見解（deformazioni professionali、直訳すれば「専門的な歪曲」の意である）と特異な問題設定（specifici problemi）によって影響力を保っていたロンブローゾとその最も《秀れた》弟子たちが左派的傾向に参加したことと関連性があるのだろうか？あるいは1848年の後期ロマン主義の遺産なのだろうか？（中略）またはイタリアでは多数の流血犯罪が一定の知識人集団に衝撃を与え、この《野蛮な》現象を《科学的に》（つまり自然科学的に）説明することなしには前に進むことは出来ないと彼らが考えていたことと関連があるのだろうか？」¹²⁾。

グラムシがロンブローゾに注目するのは、サバルタン集団の成員やその指導者の先天的な「犯罪者性」を「科学的に」（つまり「実証主義的」方法という意味であり、ロンブローゾが関心をもったのは「犯罪」ではなく「犯罪者」であった）論証しうるとして、そのなかにラザレツィのようなサバルタン集団の指導者や抵抗、反乱の指導者をも含んでいたからであった。またそれがラザレツィとその思想、運動についての表象と世論形成に強力な影響力を發揮し

たからでもあった。ロンブローゾの見解は、ラザレティ運動の意義を「異常者の犯罪」として矮小化し、抹殺しようとする支配集団の言説に「科学的」な体裁をともなって最大限組み込まれたのである。

ロンブローゾによれば「生来性犯罪者」の類型には「政治的犯罪者」も含まれる。「パリ・コムニオン」の参加者からリソルジメント運動の指導者マツィーニ、ガリバルディ、さらにはマルクスやエンゲルスまでこの類型の人物とされる¹³⁾。また彼は、ラザレティを「宗教的狂人 *follia religiosa*」あるいは一般的異常者 (*pazzi comuni*) とは異なる使徒 (*apostoli*) タイプの「偏執者 *paranoia*」と呼んでいる¹⁴⁾。ロンブローゾが行なったことは、イタリアにおける国民国家形成期の社会的諸矛盾の表出に他ならないラザレティ運動や南部、島部におけるサバルタン各層の抵抗、反乱、蜂起などの諸運動の真の社会的・歴史的原因を隠蔽し、それを個人や集団の「病理的」原因へと矮小化することであり、またそれに「科学的＝実証主義的」裏付けを与えるものに他ならなかった。

かくしてリソルジメント＝国民国家形成の「正史」は、その裏面として「歴史」から排除された様々な種類の「異常者」のエピソードによって補完される。「正史」が認知するのは正常人々つまり既存のヘゲモニーの枠内で、それを支え、再生産し、さらに「進化」させる人々のみであり（その意味ではロンブローゾの発想には当時のエリート理論の影響も認められる）、サバルタン集団はまさに二重の意味で「歴史の周縁」に追いやられたのである。一つは現実の歴史過程からの排除・周縁化という意味であり、二つには歴史像（ここではリソルジメント＝イタリア国民国家形成史）からの排

除・周縁化という意味で。つまり現実的歴史過程において、彼らは「上からの近代化＝受動的革命」を阻害する夾雑物、異物にすぎず、また国民国家形成史においては正常・健全な「国民」像から排除さるべき逸脱者・非正常者であり、その意味で歴史から「消去」さるべき者たちであった。

このような反乱、蜂起は南部や島部で大規模に頻発したが、グラムシがラザレティ運動の意義に注目するのはそこに「共和主義」的要素が明確に反映されているからである。またこの運動が統一国家成立後の二番目の首都であるフィレンツェを中心都市とするトスカーナ地方で起こったことも重要な意味をもっている。つまりサバルタン層の抵抗、反乱、蜂起は「後進的で未開、野蛮な」南部で勃発したばかりでなく、中部イタリアでも起きたことの意義つまり後進地域だけに限らないし、しかも「共和制」の実現という「先進的」要求を掲げていたことの意義にグラムシは注目したのである。換言すれば、サバルタン問題は「後進かつ未開地域としての南部問題」という地域問題や「野蛮・劣等な南部人」という生物学ないし病理学の問題に還元される問題ではなく、広範な民衆の自発的・能動的参加を欠如させた国民国家形成過程が内包する歴史的・社会的諸矛盾に起因することをグラムシは重視したのである。

さらにQ 25の各草稿には「南部問題」に関する草稿は含まれていない点も注目すべきである。グラムシのサバルタン問題探究の起点に「南部問題」に関する考察があったことは明らかである。しかしながらグラムシの考察・探究は「南部問題」という地理的・歴史的限定をはるかに超えて展開していく。グラムシの探究のなかで、サバルタン問題は「南部問題」という

枠組みから「離陸」し、まさに「Q 8 プラン」に記された個別論題の枠をも超えて、それらの諸論題を貫く横断的主题となっていくのである。Q 25は未完の「ノート」ではあるが、その各草稿を検討すれば、上記の諸点が鮮明に浮かび上がってくるのである。

4. サバルタンと知識人

グラムシは前述のごとく「科学的=実証主義的」でかつ「進歩的」潮流の知識人が、南部や島部をはじめとするサバルタン層の表象を形成し、それに「科学的」な裏付けを与え、そのことによって既存支配層のヘゲモニー形成に「寄与」したことを重視している。つまりサバルタン論は知識人論と相互補完の関係にある点をグラムシは重視している。このような視点はすでに前述したQ 1の草稿から明確であるがそれはQ 3 § 12 A, Q 3 § 47 BおよびQ 7 § 30 Bなどでも再三とりあげられる。「『南部の人々』に与えられた《野蛮性(未開性) barbarie》という生物学的見解が、イタリアの指導階級 classe dirigenteの政治にとってどのような歴史的役割を果たしたか明らかである」(Q 7 § 30 B)¹⁵。グラムシはそのような知識人の一人にロンブローゾを挙げている。Q 1からのサバルタン関連草稿の分析において特徴的なのは、グラムシが『ノート』執筆以前から最も関心をもった主題の一つである「南部問題」との関連が濃厚なことである。グラムシにおいてサバルタン問題についての考察は「南部問題」を起点としているのは明らかである。しかしながらこれまでのQ 25の各草稿分析からも明確なごとく、Q 25ではサバルタン問題は「南部問題」という地理的限定を超えて「拡張」され、それはイタリア国

民国家形成史というより「総合的な文脈」のなかで再定礎され、グラムシが各「ノート」で探究してきた歴史的、文化的、社会的、政治的諸テーマを、「周縁化」されたサバルタン層という視点から再編・再構成しようとする企図が明確である。またやはり基軸のかつ横断的主题である「知識人論」と相互補完的な主題としても鮮明となる。したがって「サバルタン問題」はたんなる個別的論題ではなく、各主題(Q 8プランなど)を通底する横断的テーマ(知識人論がそうであるように)であることが明らかである。すでに触れたようにQ 25に含まれる8草稿には「南部問題」を主題とする草稿が一つも含まれていない。それは一見すると奇異な印象を与えるが、グラムシにとってサバルタン問題が「南部問題」のたんなる一部ではなく、サバルタン問題がむしろ後者の地理的・歴史的限定をおおきく超える問題性を内包していることの表明であった、と捉えるほうが『ノート』全体の内在的把握にとって合理的と言えよう。ここでは補足的に「南部問題」に関するQ 1草稿およびその前提となった1926年の未完論文の要点を簡潔に示しておきたい。

グラムシは、リソルジメントの歴史過程の特質を論じた草稿(Q 1 § 44 A)で「北部に生み出された南部にかんする感情の総体」について次のように述べている。「南部の『貧窮 miseria』は、北部の人民大衆にとっては『歴史的に』理解しがたいことであった。彼らが理解しなかったのは、この統一が対等を基礎に形成されたのではなく、都市 農村という地理的關係における南部に対する北部のヘゲモニーによるものであった、ということである。すなわち北部は南部の犠牲によって豊かになった『吸血鬼』のようなものであり、工業の発展は、南部農業

の窮乏化に依存していたのである」。しかしながら北部にとっての南部の表象は「ブルボン王家支配が近代的発展に対置した妨害から南部が解放されたあと、南部が進歩しなかったとすれば、貧窮の原因は、外的なものではなく、内的なものである」ことを意味し、「すなわち、あとはただ、人々の生来の無能力、彼らの未開性、生物学的劣等性、といった説明しか残っていなかった。すでに広まっていたこうした意見は、実証主義的社会学者によって補強されすっかり理論化されて、科学盲信の時代に『科学的真理』の力を帯びた」¹⁶⁾。また南部問題に関する未完論文（1926年）は、上述の考察の前提すなわちサバルタン論の原点のひとつとみなしてよい内容であるのでその主要部分を紹介しておきたい。グラムシは特定の南部イメージが「毛細管的形態」で「普及」されたが、その特徴は「南部は、イタリアの文明の発展へのより急速な進歩を妨げる鉛の球である。南部人は、自然的宿命により生物学的に劣等な存在、なかば野蛮人または完全な野蛮人である。南部が後進的であるのも、その罪は資本主義制度やなにか別のいかなる歴史的原因のせいでもなくて、南部人を怠惰で無能で犯罪的で野蛮にした自然のせい」とするものであった。またこのような南部観の媒介、普及に当時の左派を代表する社会党が加担していたことを鋭く指摘している。「社会党は、大部分がこのブルジョア的イデオロギーの北部プロレタリアートへの媒介者であった。社会党は、(略)いわゆる実証主義学派の著述家たちの一党の『南部主義的』文献全体にその認可を与えた。(略)ここでもまた『科学』が、貧窮者・被搾取者を押しつづすのに用いられたが、しかし今度は、科学が社会主義者の色調で偽装し、プロレタリアートの科学であると強弁

していた」¹⁷⁾。この草稿から明らかなように、グラムシはすでに「南部問題」の探究の時点から、それがたんなる「地域問題」ではないこと、「南部」表象の「科学的言説」つまり実証主義的「科学」が果たした知的ヘゲモニー機能および「左派」を含む「受動的革命」型の社会的・政治的ヘゲモニー、さらには「南部の未開性、南部人の劣等性」イメージの「普及」にかかわる「北部」の文化的ヘゲモニー（メディアを含む）、およびそれらと密接に関連する「知識人」問題の重要性などを重視していた。これらの視点はすでに述べてきたように「サバルタン問題」の考察においても発展的に継承されている。「南部問題」から「サバルタン問題」への考察の継承と発展、連続と飛躍、それを雄弁に示しているのがこの「サバルタン・ノート（Q25）」に他ならない。

おわりに

本稿では、Q25の草稿分析を通じて、Q25を含む「フォルミア・ノート」がそれ以前の一連の「ノート」のたんなる「機械的転写」ではなく、重要な加筆・推敲がなされていること、さらにサバルタン論等「フォルミア・ノート」で展開される諸テーマはいわゆる「Q8プラン」に短絡的に還元されるのではなく、同プランからの新たな展開・発展と位置付けるべきであり、とくにこのQ25は「各論題」を徹底する横断的テーマとしての構想をもつこと、したがって「校訂版」編者序文における「Q8プラン＝最終計画」説は「不適切」であること、など検討してきた。Q25に含まれる8草稿をはじめとするサバルタン論関連草稿の本格的な分析は、わが国のみならず国際的にもきわめて不十

分であり、したがってQ 25の全草稿および関連草稿の分析が不可欠であるが、本稿で検討できなかった他の草稿については、今後の課題として継続したい。またこれらの諸課題は、サバルタン論が内包する横断的テーマという特質からも明らかであるが、哲学・思想論、知識人論、政治科学論、リソルジメント論、アメリカニズム論、文化論などの個別的主题との内在的関連性の解明とも深く関連している。その意味で「サバルタン・ノート（Q 25）」は、『ノート』全体の総体的把握にとって「カギ」となる「特別ノート」の一つと言ってよいだろう。またグラムシ研究に対し鋭い問題提起を投げかけているサバルタン研究との内在的連関の明確化のためにも、Q 25の総体的研究は不可欠であろう。本稿はそのための問題提起的試論である。

注

- 1) Risorgimento. Einaudi. 1949. Prefazione,
- 2) 拙著『グラムシ研究の新展開』御茶の水書房、2003、第1章参照。
- 3) 拙稿「A. グラムシにおけるサバルタン論の生成に関する覚書」、本誌第39巻第1号、2003年6月、参照。
- 4) Q C. pp935 ~ 36
- 5) Q C. Prefazione, (邦訳参照、大月書店版第1巻、26ページ)
- 6) ibid .
- 7) 前掲拙稿、参照
- 8) 前掲拙著、第1章参照
- 9) イタリアの研究者F. フロシーニは、その著作のなかで詳細に各研究プランの分析を行っている。「Q 8プラン」等についても緻密に分析しており、参考になる点も少なくないが、やはり基本的にはジェルラターナ説に依拠しており、Q 25を含む「フォルミア・ノート」の独自の意義については言及していない。「Q 8プラン」には含まれないテーマの「特別ノート」の存在を指摘してはいるが、その重要性の認識は弱いと言える。同書は、その他にも重要な問題提起を含んでおり、別の機会に詳細に検討したい。F. Frosini, Gramsci e La filosofia, Carocci, Roma, 2003, pp57 ~ 65
- 10) Q C. p297, p2279
- 11) Q C. p22 (邦訳参照、前掲大月版、107ページ)
- 12) Q C. pp2293 ~ 94
- 13) P. Darmon, Medecins et Assassins. Editions du Seuil, 1989, 邦訳、鈴木秀治訳『医者と殺人者』新評論、1992、69ページ
- 14) L. Burfretti, Lombroso. UTET, 1975, p269, p299
- 15) Q C. p879
- 16) Q C. p47 (邦訳参照、大月版、141ページ)
- 17) La Costruzione del Partito comunista, Einaudi, 1971, p140 (同前、486ページ)

[付記] ここでは本文では言及できなかったが、わが国におけるグラムシのサバルタン論を発展的に位置付ける見地から、筆者の見解とはきわめて対照的な片桐薫氏（以下敬称略）の見解について補足しておきたい。まず第一に指摘できるのは、氏はQ 25の各草稿の内容に全く言及することなく、グラムシのサバルタン論を独断的に論じていることである。彼の見解は次の通りである。「グラムシの従属論は、一部で考えられているようなたんなる『民衆史』もしくは『対抗文化』もしくは二者択一的・閉鎖的な文化観ではなかった。こうしたかれの従属論の誤った理解の主な原因は、『獄中ノート』全体から読みとらず、『歴史の周辺で - 従属的社会集団の歴史』と題するグラムシにとっては未完の『ノート』25（しかも20数ページの）だけに拠っているところにある」（『ポスト・アメリカニズムとグラムシ』リベルタ、2003、89ページ）。ここにはいくつもの混乱した「見解」が混在している。まず第一に、グラムシのサバルタン論が「たんなる民衆史」もしくは「対抗文化」論ではないという見解が、何の論証もなく断定されている。筆者が本稿および別稿において各草稿分析を通

じて示したのは次の点である。つまりグラムシが民衆＝サバルタン層の具体的分析（ラザレティの千年王国運動など）を通じて強調したのは、サバルタン層の自律性（Autonomia）獲得のための諸運動の「痕跡」を軽視せず、さらにそれらを「周縁化」したり「抹殺」しようとする支配集団とサバルタン集団との複合的ヘゲモニー関係・闘争のなかに位置付けることである。サバルタン集団の「歴史」とは自動的に「記録」されるものではなく、それ自体がまさにヘゲモニー闘争のなかで「獲得」されるものに他ならない。その意味で、Q25の各草稿を検討すれば明白であるが、サバルタン論には当然ヘゲモニー論の具体的・歴史的対象としてのサバルタン＝民衆や「対抗文化」論的要素が含まれ（片桐はグラムシが重視したラザレティ運動についても全く言及していない）、またそれは「方法的」概念としても、歴史的「主体」にかかわる概念としてもQ25において練成されるのである。

第二の点はより重大な誤りである。というのは既に述べたようにQ25を含む一連の「フォルミア・ノート」は、それ以前の「トゥーリ・ノート」とは異なる意味で『ノート』全体の解説にとって重要な意義を有しているからである。まさに『ノート』全体とQ25を二者択一的に対立させて捉えているのは氏自身に他ならない。Q25およびそこに収録されなかった関連草稿の解析が『ノート』全体の把握にとってきわめて重要な意義を有していることは本稿等の分析によって基本的に明らかと言えよう。サバルタン論の「誤った理解の主な原因」がQ25だけに依拠しているからだという断定も、その論拠は一切示されていない。プッティジも指摘していることだが、これまでのサバルタン研究の重要な問題点は、主として英語版アンソロジーに収録されたごく一部の関連草稿のみに依拠して、グラムシのサバルタン論を検討したことであったことは明白である。つまりQ25の総体的検討なしにサバルタン論が検討されてきたのである。氏においてもまたQ25は全く検討の対象とされていない。しかも『ノート』全体と言いながら、「校訂版」を検討していれば明白なはずの重要論

点（Q8プラン問題など）も無視されている。また「校訂版」に依拠すれば、三種類の草稿（A、B、Cの各草稿）の区別と関連が『ノート』解説に決定的に重要となるが、そのことにも全く言及されていない。つまりQ25も全く検討されていないだけでなく、『ノート』校訂版もまた内在的に検討されていないのである。つまり氏の見解の「誤った理解の主な原因」は、『ノート』の総体的検討もQ25の各草稿の検討もなされていないことに起因している。

また看過できないのはQ25が量的に少ないことも、Q25を重視しないことの根拠としている点である。『ノート』原本では17ページ分が入入されている（氏は20数ページとしているが、その論拠は示されていない）。しかしながらQ25に収録された8草稿の背後には、多くの準備的草稿（AおよびB草稿）が存在する。主題が明確な一連の『特別ノート』とは、その背後にある多くのA、B草稿も含めて検討すべき『ノート』であることはQ25のみならず自明のことである。さらに『ノート』原本を見れば明白であるが、獄中でのノート（学生用横罫）の入手が大変困難なため（執筆許可自体が異例であった）極細字で記入しており、平均一行当たりの字数は通常の倍近いのである。Q25は未完の「ノート」であることは事実だが、収録された8草稿およびそのための準備的草稿を併せて検討すれば、その草稿の量の多寡に還元されえない重要性が浮上してくるのである。この点からも氏がQ25とその関連草稿を殆ど内在的に検討、吟味することなしに独断的判断を下しているのは明白であろう。さらに別の個所では、Q8草稿のほとんどがQ3からの「転写」であるとこれも断定している（前掲書、93ページ）。すでにジェルラターナ序文の問題点として「機械的転写」説が誤りであることを論証したので、ここでは反復しないが、このような初歩的かつ基本的な誤謬は、A、C草稿を対照すれば即座に判明する点であり、このことから氏が関連各草稿の検討を行わずに独断的判断を下していることは明らかである。

[2003年7月24日記]